日蓮大聖人御書全集

日女御前御返事（にちにょごぜんごへんじ）

（嘱累品等大意の事（ぞくるいほんとうたいいのこと））

新版2090～2097

日女御前御返事（嘱累品等大意の事）

弘安元年（'78）6月25日　57歳　日女

御布施七貫文、送り給び畢わんぬ。

嘱累品の御心は、仏虚空に立ち給いて、四百万億那由他の世界に、武蔵野芒のすすきのごとく、富士山の木のごとく、簇簇膝詰寄ぞくぞくとひざをつめよせて、頭を地につけ、身を曲げ、合掌をあわせ、汗露繁あせを流し、つゆしげくおわせし上行菩薩等・文殊等・大梵天王・帝釈・日月・四天王・竜王・十羅刹女等に法華経を譲ゆずらんがために、三度まで頂を

摩

なでさせ給う。譬えば、悲母の一子が頂のかみをなずるがごとし。その時に、上行乃至日月等、忝き仰せを蒙って、法華経を末代に弘通せんとちかい給いしなり。

薬王品と申すは、昔、喜見菩薩と申せし菩薩、日月浄明徳仏に法華経を習わせ給いて、その師の恩と申し、法華経のとうとさと申し、かんにたえかねて万の重宝を尽くさせ給いしかども、なお心ゆかずして、身に油をぬりて千二百歳の間、当時の油にとうしみを入れてたくがごとく、身をたいて仏を供養し、後に七万二千歳が間ひじを

たと　ひも　いっし　いただき　髪　撫　ときじょうぎょうないしにちがつとう　かたじけな　おお　こうむ　ほけきょう　まつだい　ぐつう　誓　たま　やくおうほん　もう　むかし　きけんぼさつ　もう　ぼさつ　にちがつじょうみょう　とくぶつ　ほけきょう　なら　たま　し　おん　もう　ほけきょう　尊　もう　感　堪　よろず　ちょうほう　つ　こころ　行　たま　み　あぶら　塗　あぶら　灯　心　い　焚　せんにひゃくさい　あいだ　とうじ　あぶら　み　ほとけ　くよう　のち　しちまんにせんさい　あいだ　臂

灯　焚　尽

ともしびとしてたきつくし、法華経を御供養候いき。

されば、今、法華経を後の五百歳の女人供養せば、その功徳を一分ものこさずゆずるべし。譬えば、長者の一子に一切の財宝をゆずるがごとし。

妙音品と申すは、東方の浄華宿王智仏の国に妙音菩薩と申せし菩薩あり。昔の雲雷音王仏の御代に妙荘厳王の后・浄徳夫人なり。昔法華経を供養して、今妙音菩薩となれり。

釈迦如来の娑婆世界にして法華経を説き給うに、まいり

参

て、約束申して、末代の女人の法華経を持ち給うをまもるべしと云々。

観音品と申すは、また普門品と名づく。始めは観世音菩薩を持ち奉る人の功徳を説いて候。これを観音品と名づく。後には観音の持ち給える法華経を持つ人の功徳をとけり。これを普門品と名づく。

陀羅尼品と申すは、二聖・二天・十羅刹女の法華経の行者を守護すべき様を説けり。二聖と申すは薬王と勇施となり。二天と申すは毘沙門と持国天となり。十羅刹女と申すは

十人の大鬼神女、四天下の一切の鬼神の母なり。また十羅刹女の母あり。鬼子母神これなり。鬼のならいとして人を食す。人に三十六物あり。いわゆる糞と尿と唾と肉と血と皮と骨と五蔵と六腑と髪と毛と気と命等なり。しかるに、下品の鬼神は糞等を食し、中品の鬼神は骨等を食す。上品の鬼神は精気を食す。この十羅刹女は、上品の鬼神として精気を食す。疫病の大鬼神なり。

鬼神に二つあり。一には善鬼、二には悪鬼なり。善鬼は法華経の怨を食す。悪鬼は法華経の行者を食す。今、日本

国の去年・今年の大疫病は何とか心うべき。これを答うべき様は、一には善鬼なり。梵王・帝釈・日月・四天の許されありて、法華経の怨を食す。二には悪鬼が第六天の魔王のすすめによりて法華経を修行する人を食す。

善鬼が法華経の怨を食らうことは、官兵の朝敵を罰するがごとし。悪鬼が法華経の行者を食らうは、強盗・夜討ち等が官兵を殺すがごとし。

例せば、日本国に仏法の渡ってありし時、仏法の敵たりし物部大連守屋等も疫病をやみき。蘇我宿禰馬子等もや

みき。欽明・敏達・用明の三代の国王は、心には仏法・釈迦如来を信じまいらせ給いてありしかども、外には国の礼にまかせて天照太神・熊野山等を仰ぎまいらせさせ給いしかども、仏と法との信はうすく神の信はあつかりしかば、強きにひかれて三代の国王、疫病疱瘡にして崩御ならせ給いき。

これをもって上の二鬼をも、今の代の世間の人々の疫病をも、日蓮が方のやみしぬをも心うべし。されば、身をすてて信ぜん人々はやまぬへんもあるべし。またやむとも

助
たすかるへんもあるべし。また大悪鬼に値いなば命を奪わ
辺　　だいあっき　あ　　いのち　うば
る人もあるべし。例せば、畠山重忠は日本第一の大力の
ひと　れい　はたけやましげただ　にほんだいいち　だいりき
大将なりしかども、多勢には終にほろびぬ。
たいしょう　たぜい　つい　滅
また、日本国の一切の真言師の悪霊となれると、ならび
にほんこく　いっさい　しんごんし　あくりょう
に禅宗・念仏者等が、日蓮をあだまんがために国中に入り
ぜんしゅう　ねんぶつしゃとう　にちれん　怨　こくちゅう　い
乱れたり。また梵釈・日月・十羅刹の眷属、日本国に乱入
みだ　ぼんしゃく　にちがつ　じゅうらせつ　けんぞく　にほんこく　らんにゅう
せり。両方互いに責めとらんとはげむなり。しかるに、
りょうほうたが　せ　取　励
十羅刹女は、総じて法華経の行者を守護すべしと誓わせ給
じゅうらせつにょ　そう　ほけきょう　ぎょうじゃ　しゅご　ちか　たま
いて候えば、一切の法華経を持つ人々をば守護せさせ給う
そうら　いっさい　ほけきょう　たも　ひとびと　しゅご　たも

らんと思い候に、法華経を持つ人々も、あるいは「大日経はまされり」など申して真言師が法華経を読誦し候は、かえりてそしるにて候なり。また余の宗々もこれをもって押し計るべし。

また、法華経をば経のごとく持つ人々も、法華経の行者を、あるいは貪・瞋・癡により、あるいは世間のことにより、あるいはしなじなのふるまいによって憎む人あり。これは法華経を信ずれども信ずる功徳なし。かえりて罰をかぼるなり。

例せば、父母なんどには謀反等より外は子息等の身としてこれに背けば不孝なり。父が我がいとおしきめをとり、母が我がいとおしきおとこを奪うとも、子の身として一分も違わば、現世には天に捨てられ、後生には必ず阿鼻地獄に堕つる業なり。いかにいわんや、父母にまされる賢王に背かんをや。いかにいわんや、父母・国王に百千万億倍まされる世間の師をや。いかにいわんや出世間の師をや。いかにいわんや法華経の御師をや。

黄河は千年に一度澄むといえり。聖人は千年に一度出ず

るなり。仏は無量劫に一度出世し給う。彼には値うといえども、法華経には値いがたし。たとい法華経に値い奉るとも、末代の凡夫、法華経の行者には値いがたし。

いかんぞなれば、末代の法華経の行者は、法華経を説かざる華厳・阿含・方等・般若・大日経等の千二百余尊よりも、末代に法華経を説く行者は勝れて候なるを、妙楽大師釈して云わく「供養することあらん者は福十号に過ぎ、もし悩乱する者は頭七分に破る」云々。

今、日本国の者、去年・今年の疫病と去ぬる正嘉の疫病

とは、人王始まって九十余代に並びなき疫病なり。聖人の国にあるをあだむゆえと見えたり。師子を吼うる犬は腸切れ、日月をのむ修羅は頭の破れ候なるは、これなり。

日本国の一切衆生すでに三分が二はやみぬ。また半分は死しぬ。今一分は身はやまざれども、心はやみぬ。また頭も、顕にも冥にも破れぬらん。罰に四つあり。総罰・別罰・冥罰・顕罰なり。聖人をあだめば、総罰一国にわたる。また四天下、また六欲・四禅にわたる。賢人をあだめば、ただ敵人等なり。今、日本国の疫病は総罰なり。定めて

聖人の国にあるをあだむか。山は玉をいだけば草木かれず。国に聖人あればその国やぶれず。山の草木のかれぬは玉のある故とも愚者はしらず。国のやぶるるは聖人をあだむ故とも愚人は弁えざるか。

たとい日月の光ありとも、盲目のために用いることなし。たとい声ありとも、耳しいのためになにの用かあるべき。日本国の一切衆生は盲目と耳しいのごとし。この一切の眼と耳とをくじりて、一切の眼をあけ、一切の耳に物をきかせんは、いか程の功徳かあるべき。誰の人かこの功徳を

ば計るべき。たとい父母、子をうみて眼・耳有りとも、物を教うる師なくば、畜生の眼・耳にてこそあらましか。

日本の一切衆生は、十方の中には西方の一方、一切の仏の中には阿弥陀仏、一切の行の中には弥陀の名号、この三つを本として余行をば兼ねたる人もあり、一向なる人もありしに、某、去ぬる建長五年より今に至るまで二十余年の間、遠くは一代聖教の勝劣・先後・浅深を立て、近くは弥陀念仏と法華経の題目との高下を立て申すほどに、上一人より下万民に至るまで、このことを用いず。あるいは

師々に問い、あるいは主々に訴え、あるいは傍輩にかたり、あるいは我が身は妻子・眷属に申すほどに、国々・郡々・郷々・村々・寺々・社々に沙汰あるほどに、人ごとに日蓮が名を知り、法華経を念仏に対して念仏のいみじき様、法華経叶いがたきこと、諸人のいみじき様、日蓮わろき様を申すほどに、上もあだみ下も悪む。日本一同に法華経と行者との大怨敵となりぬ。

こう申せば、日本国の人々ならびに日蓮が方の中にも物におぼえぬ者は、「人に信ぜられんと、あらぬことを云う」

と思えり。これは、仏法の道理を信じたる男女に知らせんりように申す。各々の心にまかせ給うべし。

妙荘厳王品と申すは、殊に女人の御ために用いることなり。妻が夫をすすめたる品なり。末代に及んでも、女房の男をすすめんは、名こそかわりたりとも功徳はただ浄徳夫人のごとし。

いおうや、これは女房も男も共に御信用あり。鳥の二つの羽そなわり、車の二つの輪かかれり。何事か成ぜざるべき。天あり地あり、日あり月あり、日てり雨ふる、功徳の

草木花さき菓なるべし。

次に勧発品と申すは、釈迦仏の御弟子の中に僧はあまたありしかども、迦葉・阿難、左右におわしき。王の左右の臣のごとし。これは小乗経の仏なり。また普賢・文殊と申すは、一切の菩薩多しといえども、教主釈尊の左右の臣なり。

しかるに、一代超過の法華経八箇年が間、十方の諸の仏菩薩等、大地微塵よりも多く集まり候いしに、左右の臣たる普賢菩薩のおわせざりしは不思議なりしことなり。し

かれども、妙荘厳王品をとかれて、さておわりぬべかりしに、東方宝威徳浄王仏の国より万億の伎楽を奏し、無数の八部衆を引率して、おくればせして参らせ給いしかば、仏の御きそくやあしからんずらんと思いし故にや、色かえて末代に法華経の行者を守護すべきようをねんごろに申し上げられしかば、仏も、法華経を閻浮に流布せんことことにねんごろなるべきと申すにや、めでさせ給いけん、返って上の上位よりも、ことにねんごろに仏ほめさせ給えり。かかる法華経を、末代の女人、二十八品を品々ごとに供養

妙荘厳王品説終
東方宝威徳浄王仏国万億伎楽奏無数八部衆引率遅馳参せ給いしかば仏御気色悪
末代法華経行者守護様懇申
殊懇愛
殊懇讃
末代女人二十八品品々供養

せばやとおぼしめす。ただ事にはあらず。

宝塔品の御時は、多宝如来・釈迦如来・十方の諸仏、一切の菩薩あつまらせ給いぬ。この宝塔品はいずれのところにか只今ましますらんとかんがえ候えば、日女御前の御胸の間、八葉の心蓮華の内におわしますと日蓮は見まいらせて候。

例せば、蓮のみに蓮華の有るがごとく、后の御腹に太子を懐妊せるがごとし。十善を持てる人、太子と生まれんとして后の御腹にましませば、諸天これを守護す。故に、太子

をば天子と号す。法華経二十八品の文字六万九千三百八十四字、一々の文字は、字ごとに太子のごとし、字ごとに仏の御種子なり。

闇の中に影あり。人これをみず。虚空に鳥の飛ぶ跡あり。人これをみず。大海に魚の道あり。人これをみず。月の中に四天下の人・物一つもかけず。人これをみず。しかりといえども、天眼はこれをみる。日女御前の御身の内心に宝塔品ましまします。凡夫は見ずといえども、釈迦・多宝・十方の諸仏は御らんあり。日蓮またこれをすいす。あらとうとし、と

うとし。

周の文王は老いたる者をやしないていくさに勝ち、その末三十七代八百年の間、すえずえにはひが事ありしかども、根本の功によりてさかえさせ給う。阿闍世王は大悪人たりしかども、父・びんばさら王の仏を数年やしないまいらせし故に、九十年の間位を持ち給いき。当世もまたかくのごとく、法華経の御かたきに成りて候代なれば、須臾も持つべしとはみえねども、故権大夫殿・武蔵前司入道殿の御まつりごといみじくて、しばらく安穏なるか。それも始終

は法華経の敵と成りなば叶うまじきにや。

この人々の御僻案には、「念仏者等は法華経にちいんなり。日蓮は念仏の敵なり。我らはいずれをも信じたり」と云々。日蓮つめて云わく、「代に大禍なくば、古にすぎたる疫病・飢饉・大兵乱はいかに。召しも決せずして法華経の行者を二度まで大科に行いしはいかに、不便、不便」。

しかるに、女人の御身として法華経の御命をつがせ給うは、釈迦・多宝・十方の諸仏の御父母の御命をつがせ給うなり。この功徳をもてる人、一閻浮提の内に有るべしや。

恐々謹言。（きょうきょうきんげん）

六月二十五日（ろくがつにじゅうごにち）

日女御前（にちにょごぜん）

日蓮（にちれん）　花押（かおう）